変わるまち

変われるまち

石巻

提供：石巻市
2023.2.4

【日本経済新聞　２０２３年(令和５年)１月５日（木曜日）２３面】

大機小機

「日本を決定した百年」、教育が要

元首相・吉田茂著「日本を決定した百年」（1967年刊）を久しぶりに読み返してみた。エンサイクロペディア・ブリタニカに英文で掲載した寄稿を和文でとりまとめ、加筆したものである。キーワードは勤勉と冒険心と柔軟性などだが、最も印象深かったのは、吉田が太平洋戦争によって灰じんに帰した日本再建の要は教育にあると確信していたことだ。

「維新の大業は、多くの教育ある国民の手で押しすすめられなければならないというのが、明治の指導者たちの気持ちであった」「全国に学校をおこすが、政府には小学校設立に補助金を出すだけの余裕がなかったので、大部分国民の負担で小学校をつくっていった。生活に追われていた民衆はなかなか子供を学校にやろうとしなかったが、政府は就学率を高めるために努力を惜しまなかったし、地方の地主たちは、多額の金を寄付して学校の設立を助けた」といった文言が並ぶ。

続けて、「現在でも田舎を旅行すると、小学校の校舎が村で一番よい建物であることが多い」「政府に参加しなかった知識人の多くは私立学校をつくって教育にあたった」とある。教育を重んじたことが日本の近代化の大きな特徴であったことを指摘している。政治家の目というより、優れた歴史家の目だ。

かつての日本には、篤志家が才能ある少年少女を個人的に支援する気風もあった。傍観者ではなく、人材育成に主体的に参画していた。教育立国といわれたゆえんである。

そして戦後、吉田は教育改革を進める。教育への熱意は国民も同じだった。終戦直後のがれきと残骸に囲まれたその日暮らしの生活の中で、六三制義務教育に賛成する国民からの手紙が、文部省や教育刷新委員会や議会や占領軍宛てに送られてくる。

それらには「『日本を復興させるものは教育以外にはない。自分たちは戦争によって国を荒廃させ、何も子孫に与えるものをもっていないが、せめてりっぱな教育だけはしてあげたい』という気持ちを伝えていた」とある。

令和も5年になった。政策の鍵は、官も民も、思い切った教育投資だ。試行と混迷の平成時代にかかわった私たちが後世のためになすべきことは、各分野にわたって、明日の日本をつくる人材を育む環境の整備に尽きる。（一礫）

社会と向き合い

宮城県泉高2年
タタル　梨沙(りさ)さん

論説委員長賞

日本の教育を見直して幸福度を上げよう

みんなは自分の住んでいる国、日本についてどのように考えているか。海外からも比較的プラスのイメージを持たれている国であると思う。治安も良い方だし、日本人特有の礼儀作法、高度な技術で他国を圧倒してきた。

しかし私はみんなに問いたい。日本が本当に良い国なのか。私はハーフということもあり、もう一つの母国とよく生活や国民性を比較することが日常的に多々あるのだが、日本には深刻に受け取るべき問題がある。

それは国民の幸福度である。実は年々と幸福度が下がっている傾向にあり、今年はなんと先進国であるのにも関わらず54位であったのだ。生活の苦しい人がとても多い国でもないのにだ。なぜこのようなことになってしまったのか考えてみると、その原因は教育にあると気付いた。

私はヨーロッパの幼稚園に通った経験があるのだが、日本の教育の仕方とは大きな違いがあった。印象に残っている出来事としては、お昼寝の時間に当番制で下級生の子守をしたり、何をして遊びましようというのは全くなく、自分たちで注意して遊んでいたりした記憶がある。そこでおそらく養われるのは積極性である。

日本の学校は生徒が主体になることがとても少ない。授業スタイルも黒板を写す、決められた課題をやる、そのようなことばかりだ。海外では自分でテーマを決め、プロジェクトのように自分の意見を表現することが日常的にあるからこそ、意見を持ったり、自分独自のアイデアを発言したりすることにより、自信や将来の夢へのきっかけとなることがあると思う。それが将来的な幸福につながるのではないか。

日本は自分を出すことを恐れ、周りの目ばかり気にする生きにくい社会を、このような教育で今になっても作り出している。私たち人間はどのように自分に正直に生きられるのか、みんなで考えてみたいと私は思う。暗黙の了解や当たり前な常識、それって本当にあなたが望み、意味を持っているものなのか考えてみるべきだ。

石巻を子どもにとってよりよいまちにするために
石巻市議会議員さんと子ども若者で
一緒に考えよう！　（抄）

期　日：２０２２年１１月２０日（日）
会　場：石巻市子どもセンターらいつ

●今日話して、一番印象に残ったこと（ワークシート）

子ども／若者

・学校で不登校の人と普通に通っている子で差別を受けていること。
・学校の問題。先生と生徒の信頼関係。不登校の人への対応。生徒同士の差別。
・意外と学校について考えてくれていたことがわかった。交通のことに関して、色々な人の意見が聞けてよかった。話を否定せず聞いてくれたこと。
・子どもたちの遊ぶ場所がもっとほしいこと。
・ルールで縛りすぎて、できないことが多い。大人の方に自分の話をしっかり聞いてもらえたのがうれしかった。公園の話。大人と子どもが話す場について。
・議員さん＋子どもたちでイベント（子どもが大人を信用できる機会に）横のつながりに私たちがなりたい。
・将来の選択肢、遊び場、色々思う所はあるけどこうして定期的に話して少しずつ一緒に改善していきたいです！！
・公園での子どもと大人の交流がない。

若者／社会人

・ルールをつくりすぎて市民が使いづらくなることも。
・子どもが自由に遊べる公園がほしいと言っている中高生が複数人いた。

石巻市議

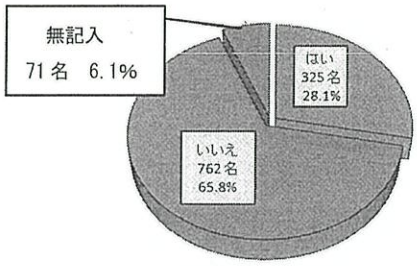
・子どもは大人のことをちゃんと見ている。子どもは自分の未来をすごく考えている。
・不登校の子どもがクラスに戻るなと陰口を言われ、また来なくなる。担任の先生を生徒がよく見ている。公園（キャッチボールなどができる）をつくってほしい。静かな図書館が欲しい。
・遊び場（公園のあり方等）の確保整備。
・自由に楽しく遊べる広場、公園、雨天施設の必要性を感じました。足の確保も。
・遊べる場所がない。

令和４年度　石巻市市民意識調査

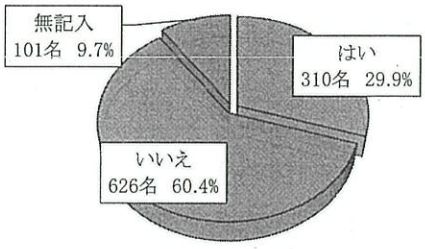
集　計　結　果　報　告　書

11　子どもの居場所づくりについて

問 57　あなたは、石巻市の子どもにとって、家でも学校でもない居場所が充実していると感じていますか。１つ選んでください。

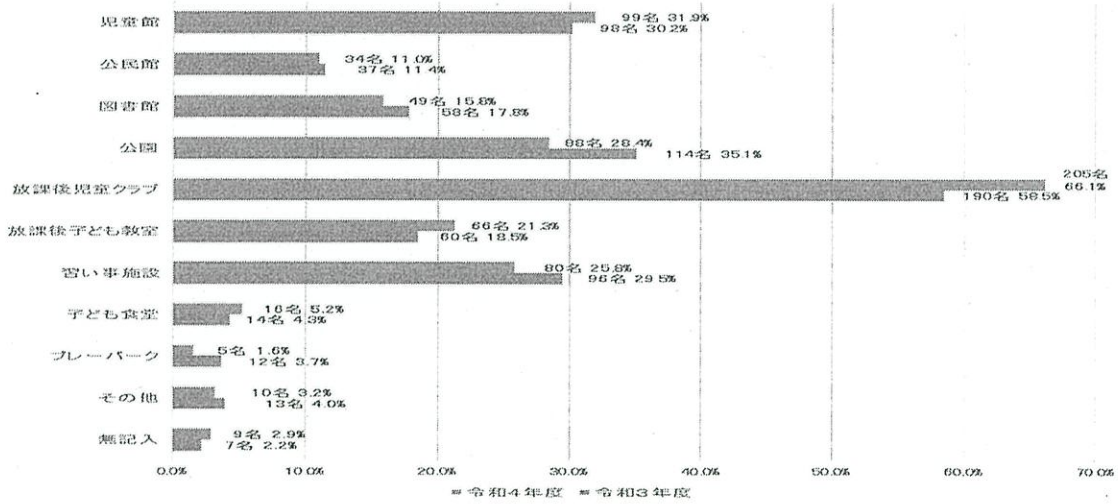


令和３年度



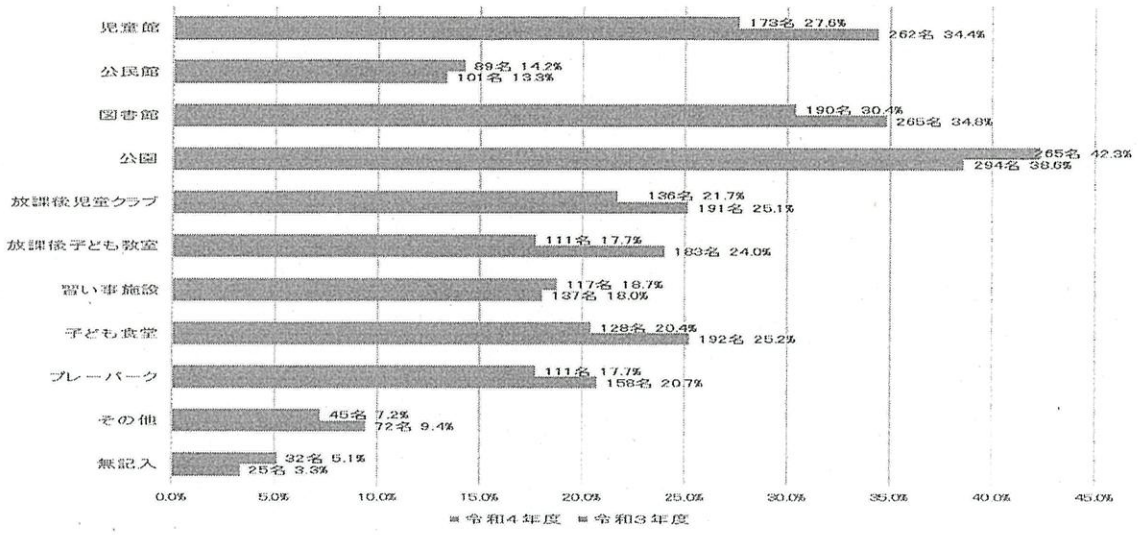
令和４年度

問 58　問 57 で「1．はい」と回答した方にお聞きします。 充実していると感じる主な場所はどこですか。当てはまるものをすべて選んでください。



No.	項　目	令和3年度		令和4年度	
		回答数	構成比	回答数	構成比
1	児童館	98名	30.2%	99名	31.9%
2	公民館	37名	11.4%	34名	11.0%
3	図書館	58名	17.8%	49名	15.8%
4	公園	114名	35.1%	88名	28.4%
5	放課後児童クラブ	190名	58.5%	205名	66.1%
6	放課後子ども教室	60名	18.5%	66名	21.3%
7	習い事施設	96名	29.5%	80名	25.8%
8	子ども食堂	14名	4.3%	16名	5.2%
9	プレーパーク	12名	3.7%	5名	1.6%
10	その他	13名	4.0%	10名	3.2%
11	無記入	7名	2.2%	9名	2.9%

問59　問57で「2．いいえ」と回答した方にお聞きします。充実していないと感じる主な場所はどこですか。当てはまるものをすべて選んでください。



No.	項　目	令和3年度		令和4年度	
		回答数	構成比	回答数	構成比
1	児童館	292名	34.4%	173名	27.6%
2	公民館	101名	13.3%	89名	14.2%
3	図書館	265名	34.8%	190名	30.4%
4	公園	294名	38.6%	265名	42.3%
5	放課後児童クラブ	191名	25.1%	136名	21.7%
6	放課後子ども教室	183名	24.0%	111名	17.7%
7	習い事施設	137名	18.0%	117名	18.7%
8	子ども食堂	192名	25.2%	128名	20.4%
9	プレーパーク	158名	20.7%	111名	17.7%
10	その他	72名	9.4%	45名	7.2%
11	無記入	25名	3.3%	32名	5.1%

いまこそ求められる 「正しく読む技術」

特別インタビュー（抄）

新井紀子 氏

国立情報学研究所 社会共有知研究センター センター長・教授

○ いま世の中にある仕事のうち「大体あっていると判断できれば問題ない」、「量がたくさんある」、「定型的である」、「直感で正しいか判断する」といった特徴を持つ仕事の多くは、AIに取って代わられる。

現在のホワイトカラーの仕事のうち5割程度はAIやロボットに代替させていく。

○ 「AIは完全ではないけど、そこそこの仕事はできる」という事実を知ることが大切。

AIによる仕事が正しいのか、間違えているのかの判断もできない人は、AIの進化とともにふるい落とされてしまうことになる。

AIを使いこなすには、AIの誇りを判断できる力、AIよりも高い能力を持つことが必要。

○ 「見えているものや起きていることを正しく表現して伝えることができない」

こういった従業員の読み書きの力の不足が手戻りコストになっており、テレワークの進んだ職場ではコミュニケーションエラーが生産性を大きく低下させる要因となっている。

一字一句、正確に読み書きできる力を伸ばすための取り組みが求められている

○ 求められているいるのは、『**汎用的読解力**』である。

分野を問わず、また自分にとって親和性があるかどうかとは無関係に、与えられた文章を基本的な構造に従って読み解く力であり、「書かれているとおり正確に読み取ろう」と努力できることである。

- 主語と述語の関係や修飾語と被修飾語の関係を理解する「**係り受け解析**」
- 指示代名詞が何を指すかを理解する「**照応解決**」
- 2つの異なる文章を読み比べて意味が同じであるかどうかを判定する「**同義文判定**」
- 文の構造を理解した上でさまざまな知識を総動員して文章の意味を理解する「推論」
- 文章と図形やグラフを比べて内容が一致しているかどうかを認識する「**イメージ同定**」
- 定義を読んで合致する具体例を認識する「**具体例同定**」

○ 読解力は学年が上がれば自然に上がるものではなく、小学生と中学生の時期に上昇し、高校生以上になるとあまり伸びない。

小中学生は教科書などで自分が知らない分野について文章を読む場面が多く、まさに文章を読むスキルや語彙を獲得している最中にある。

高校入試が終わるころに読解力や語彙の伸びが止まるのは、自分が苦手な分野の文章を読む必要がなくなるから。

中学３年生と高校１年生の平均読解能力値に有意な差は見られず、家庭での学習時間とも相関がない。

○ 文学を味わって読むような読解力ではなく、書かれた事実を事実のまま受け取る力である。

なお、子どもがテストの自己採点をできるかどうかとも相関する。

「使っている単語が同じだから大体合ってるだろう」と自己流で解釈する子と、自分の理解に誤りがあればすぐに修正できる子では、いずれ大きな差がつく。

正確に読める子ほど高い偏差値の高校に入学する。

【河北新報　２０２２年(令和４年)１１月１５日（火曜日)】

競争力低下 教育に起因

リスク回避、平等重視の「いい子症候群」

一見素直で協調性があるが、その実は競争や挑戦が嫌いで、受け身になりがち。イノベーション（革新的な価値創造）を研究する金間大介金沢大教授は最近の若者に目立つ気質を「いい子症候群」と名付け、日本の国際競争力低下への影響を懸念する。原因はむしろ上の世代にあると語った。

イノベーションを生む仕組みや精神を研究する中、若者たちのリスク回避志向が気になりました。横並び意識が強く、人前で褒められることも「浮く（目立つ)」と嫌がる。これは「公正な分配」について尋ねた調査でも明らかになりました。

「平等」「必要性」「実績」「努力」という４つの選択肢から、どれが最も公正な分配方法と思うかを問いました。２０１８～２０年、大学生ら２１１人から集めたデータでは約半数が「平等」を支持し「努力」は４分の１。今の若者の半分は努力や実績に関係なく「皆同じで構わない」と考えているのです。

ではなぜ「いい子」の傾向が強まったのか。理由の１つは皮肉にも競争を緩和し、その代わりに主体性と協調性両方を育もうとした近年の教育にあると考えられます。

挑戦する姿 若者に見せて

例えば総合学習で地域の課題をグループで話し合うといった授業が行われる。個性の重視とチームの協力が二大ミッションなので、先生は皆に発言させ、自分の意見を言わなかったり、他の意見を遮ったりする生徒を注意します。授業を成立させるため、自由な議論より協調を優先させる面も実際にはあるでしょう。この繰り返しで子どもたちは「あくまで和を乱さない範囲で個性を発揮する」という「型」を身に付けるのです。

そもそも「主体性」が十分に理解されないまま、教育の目標になってしまっている。主体性への無理解は教育現場のみならず、日本社会全体に通じていると思います。

私自身はいい子症候群を社会現象と捉えています。ただしイノベーションはトライアンドエラー（試行錯誤）から生まれる。リスクを避けていては成し遂げるのが難しい。若者の気質と世間の期待がずれているのは確かです。

「いい子」は年配者に対する自衛策ともいえます。経済が停滞し、大人の方こそ「挑戦が成長につながる」と実感できていないのに、よかれという気持ちで無責任に若者に挑戦を押し付けている。若者はそれを見透かし、いい子を演じてやり過ごしているのです。大人は自ら挑戦する姿を若者に見せてほしい。

そして若者は自己成長を大事にしてほしい。他人からの見た目が気になるかもしれませんが、昨日から今日の自分の変化に焦点を合わせる。私もその方法をもっと考えていきたいと思います。

（金沢大・金間大介教授）

【産経新聞　２０２３年(令和５年)１月１５日（日曜日）３０面】

ヤングケアラー 認知進まず

生保調査 「聞いたことない」27％

病気の親や幼いきょうだいを世話する子供を指す「ヤングケアラー」という言葉を聞いた経験がない人が27・2％いることが14日、朝日生命保険の調査で分かった。「聞いたことはあるが意味が分かっていない」は15・9％。認知が進まない状況が浮かび上がった。家族の世話が重荷となっている子の発見や支援の遅れが懸念される。

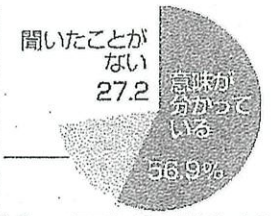
負担を自覚していない子もおり、周囲が理解を深め、気付いて声掛けすることが重要とされる。

昨年9～10月にインターネットで調査し、男女2630人の有効回答を得た。ヤングケアラーの「意味が分かっている」と答えた人は56・9％だった。年代別に見ると、「聞いたことない」と答えた人の割合最も低かったのは60代の・6％。最も高かったの20代の31・8％で、若い代ほど認知度が低かった。

厚生労働省は令和4年から3年間を集中取り組期間と位置付けている。発活動に力を入れていが、さらなる周知が求めれそうだ。

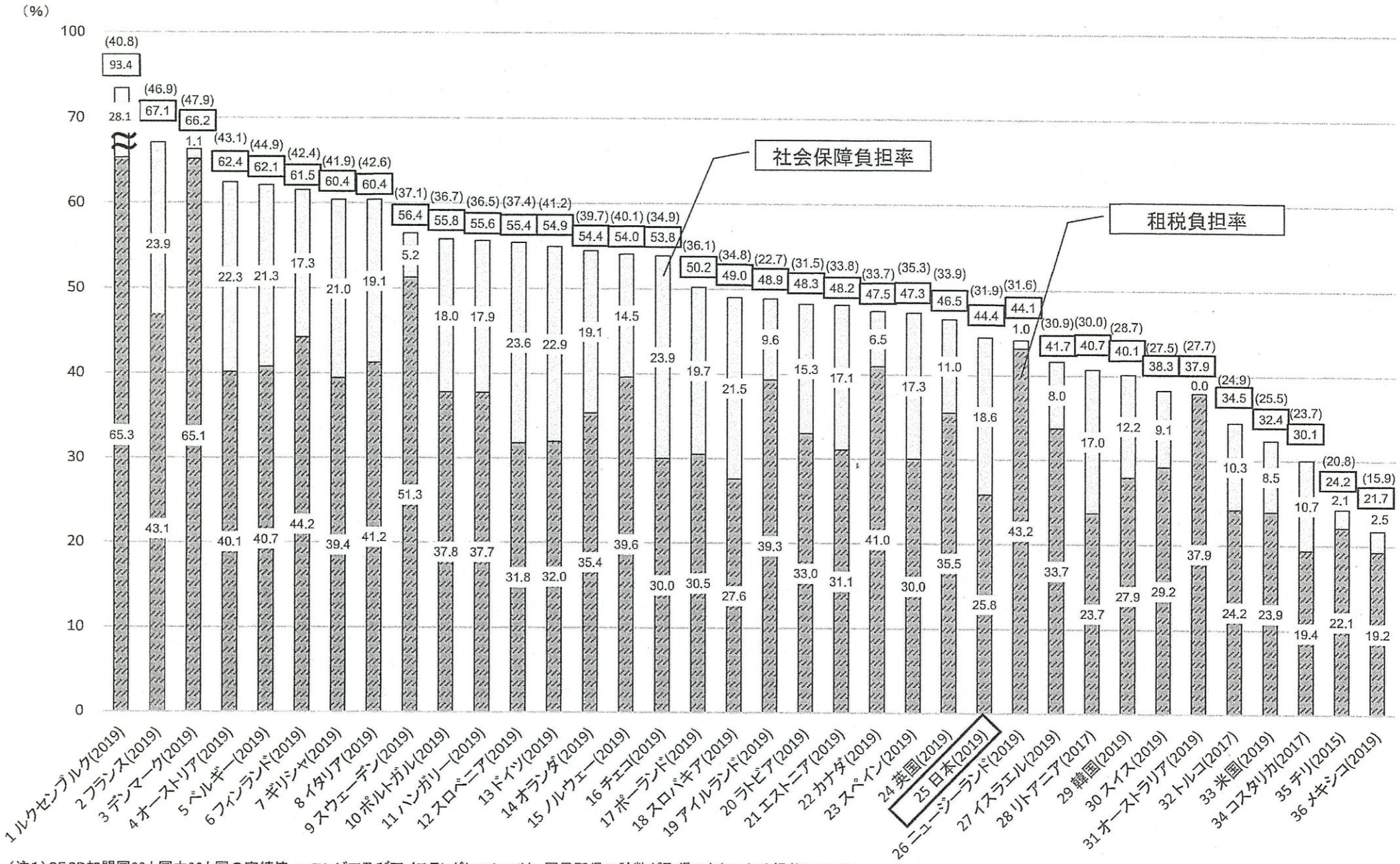
厚労省の調査では、小6年生の6・5％が「世をしている家族がいる」と回答。こうした状況の小学生は、遅刻や早退が多く、学校生活や健康に影響があるとも指摘されている。

ヤングケアラーの認知度



※朝日生命保険調査による

国民負担率の国際比較（OECD加盟36カ国）



（注1）OECD加盟国38カ国中36カ国の実績値。コロンビア及びアイスランドについては、国民所得の計数が取得できないため掲載していない。
（注2）括弧内の数字は、対GDP比の国民負担率。
（出典）日本：内閣府「国民経済計算」等　諸外国：OECD "National Accounts"、" Revenue Statistics"